

人魚の嫁入り

～縁結びの木 2

2009.04.17

姉さん、ただいま！

バタン、と 扉の閉まる音がして、弟が帰ってきました。

あ、あの声は… よかった。

人魚は ほっとして、
お椀を テーブルの上に 並べはじめました。

小鳥ちゃん、来てくれたのね？

人魚が にっこりしながら 弟の顔をのぞきこむと、
魚は、照れたような表情で、ふい、と 横を向きました。

…うん。
姉さんには、かなわないや。

そう。
人魚の姉さんには、なんでも お見通しなのです。

魚が、ずっと前から 小鳥に恋していたことも。

小鳥も 魚のことが 気になっていたのに、
自分では そのことに気づいていなかった、ということも。

そんな小さな恋も、人魚が ハナミズキに耳打ちしてくれたおかげで、
ふたりの間で どうやら 花を咲かせ始めたようです。

人魚には、弟の声の調子から、そんなことまで わかってしまうのです。

さ、ごはんにしましょう。

人魚は、魚の鼻のアタマを ちょん、と 軽く つつつき、
キッチンへ 姿を 消しました。

部屋には、温かな いい匂いが 広がっていました。

弟の恋のお手伝いをしたまでは よかったけれど…

実は、人魚にも 好きなひとがいました。

姉弟らしく、そのあたりは よく似ていて、
人魚もまた、自分の想いを相手に伝えられないまま、
何年もの月日が 経っていました。

いいえ。
ちょっと 違うかもしれません。

人魚は、物陰から 彼の姿を見ているだけで、
とても 幸せだったのです。

もう少し、このまま あのお姿を 遠くから見たい…

そのまま、さらなる数ヶ月が、
海風とともに 通り過ぎていきました。

今朝も、小鳥は お気に入りの場所へやってきました。

いつもなら、木の実を食べながら 魚が来るのを 待っているのですが、
今日は ぼんやりと、海面を見つめているだけでした。

おはよう！小鳥ちゃん。
どうしたの、ぼんやりしちゃって…。

魚が、いつものように ぴよんぴよん飛び跳ねて、
自分がやってきたことを 小鳥に 知らせました。

小鳥は、ちょん、と 首をかしげました。

あ…

おはよう。お魚さん。

うーん。ちょっとね。

ハナミズキさんから 聞いた話なんだけど…。

知ってる？

小鳥の話は、こうでした。

魚のお姉さんである人魚には、数年前から 好きなひとがいました。
そして、実は、彼の方でも、ずっと 人魚に 想いを寄せていたのです。

ひよんなことが きっかけで、
ここ数ヶ月で、ふたりは 微笑みや言葉を交わすようになり…

ついに 彼は 人魚にプロポーズしました。

自分は 海のぎりぎりの際に家を建てるから、
家中を水びたしにしても構わない、自分と一緒に暮らしてほしい、と。

それが、今朝の夜明け前のことなんですって。

なぜか 浮かぬ顔で、小鳥は 話を 締めくくりました。

えええ？ そうなの？

姉さんに 好きなひとが いるんじゃないかとは 思っていたけれど、
プロポーズされたなんて話、ぜんぜん 知らなかったよ！

姉さん、ひどいなあ。

魚は、唇を とがらせました。

それは そうです。
たったふたりの、姉弟なんですもの。

そんな大切な話を、なぜ、弟に 秘密にしておくのでしょう。

ううん。
それがね、お姉さん、お断りしたらしいのよ。

えええええ???? どうして?
姉さんだって ずっと そのひとのことが 好きだったんだから、
断る理由なんか、ないじゃないか!

魚は、ふたたび のけぞり、
波に飲み込まれて 危うく 溺れそうになりました。

そうなんです。

人魚がお断りしたのは、
「人魚だから」という理由ではないはずでした。

なぜなら、人魚とはいえ、誰かを 心の底から 愛したならば、
陸に上がって生きる方法は あるからです。

もちろん、魔法使いのおばあさんをお願いすることなく。
声を失うこともなく。
相手の心変わりのために 泡になる危険性もない。

海に生きる者だけが知る、
人魚が陸に上がる 正しい方法が あるのでした。

魚は、小鳥のススメもあり、
その日は デートを中止して、急いで 家に 泳いで帰りました。

人魚の歌が 今日は 庭まで もれ聴こえてくることはなく、
家の中は しんと 静まり返っていました。

姉さん、ただいま！

魚は、いつもの通りを装って、元気な声を出しました。

人魚は、ピアノの前に座り、じっと 鍵盤を見つめていました。

びっくりして顔を上げた 姉の頬には、
涙の流れ落ちた跡が 薄く 残っていました。

あら……

ずいぶん 早かったじゃないの？
小鳥ちゃんと 喧嘩でもしたの？

……姉さん！

それは、こっちのセリフだろっ

魚は 思わず 声のトーンを上げました。

なんで プロポーズを 断ったんだよ？
姉さんは、そのひとのこと、ずっと ずっと 好きだったんだろ？
どうして そのひとのところへ いかないんだよ？

人魚は 驚いて、
なぜ その話を 弟が知っているのか、ということをも
疑問に思う暇も ありませんでした。

そ、それは……

美しい顔の乙女は、ふたたび 鍵盤へ 目を落としました。

震える唇を そっと 人差し指で押さえ、顔を上げた 人魚の表情は、
すでに 穏やかになっていました。

わたし、ここが 好きなのよ。
海で生まれ、海で育った。

いくら、陸に上がることを許されている 数少ない海の者とはいえ、
やっぱり、わたしにふさわしい場所は、海だと思うの。

弟の目の中の炎を 沈めるかのように ゆっくりと ひとつ 呼吸をして、
人魚は 続けました。

ひとの心は、わからない。

人魚姫の言い伝えも、あるでしょう？

たとえ 泡になって消えることがなくとも、
ひとの心に、永遠なんてものは、ないわ。

それに、あのかたの元へ行ったら、
あなたとは 会えなくなってしまう。

そんなの、イヤですもの。

人魚は にっこり 笑って、弟の手を取ろうとしました。

姉さん、なにを 時代遅れなこと、言ってるんだよ！
『人魚姫』なんて、大昔の話だろ？

魚は、人魚の伸ばした手を避けて、身をよじりました。

あいつを 見ろよ。
まんまるおなかの赤いあの子は、
崖の上まで 好きなひとを 追っかけていったんだぞ？

だから、ちゃんと、自分の力で 幸せになったじゃないかっ！

弟の目は、涙で いっぱいでした。

ここまで 自分を育ててくれた、姉さん。
自分の恋を 応援してくれた、姉さん。

魚は、そんな姉さんにこそ、幸せになってもらいたいのです。

だけど、姉さんのことを 本当に 縛っているのは、
弟を置いて ひとりで 幸せになるわけにはいかない、
と 決めている姉さん自身である、ということも わかっていました。

魚は、もはや、
いつも人魚の後を追いかけている 小さな男の子ではありませんでした。

姉の心がわかるほど、おとなになっていたのです。

姉さんは、怖いんだろ？

魚は、ちょっと ためらったのち、思い切って 叫びました。

姉さんは、ほんとの本当は、
自分が幸せになれるのかどうか、わからなくて、
怖いんだろっ

ばん、と 扉を開けて、
魚は、人魚の返事も待たずに、海へと 飛び出していきました。

ぶくぶくと 大きな泡が、いくつか 残りました。

その夜、人魚は、いつものように 潮の回廊を従えて、
ハナミズキのもとへ やってきました。

ハナミズキは、人魚が ひととおり 話し終えるまで、
うなずきながら、黙って 聴いていました。

夜の風が さらさらと そよぐ中、
ハナミズキは、震える人魚の肩に そっと 手を伸ばし、ささやきました。

あなたに、って、お預かりしているものがあるの。

ハナミズキは、腰をかがめると、
プレゼントを、人魚の首に掛けてあげました。

それは、とても美しいネックレスでした。

この葉っぱは、小鳥ちゃんが、あっちのお山まで 飛んで行って、
とびっきり いいやつを 運んできてくれたのよ。

この、青い まあるいのは… わかるわね？

人魚は、こっくりと うなずきました。

青いまあるい石は、弟の守り神でした。

海に生きる者は 誰でも、
守り神と呼ばれる石とともに 生まれてきます。

その守り神は、それを持つ者を、絶対的な力にて 守り通すもの。
この守り神を 不用意に手放した者は、
海神の怒りを買って 海の底に召される、という言い伝えがあります。

守り神を 持ち主以外に身に着けることが許されるのは、
生涯 添い遂げると 約束した、最愛のパートナーのみである、
ということも 伝えられていました。

それなのに、魚は・・・
弟は・・・

最愛の存在へ捧げるべき守り神を、
姉である自分に、自分の運命ごと 託そうとしているのです。

守り神を捧げた相手が不適切である、と 海神が 判断した場合には、
元の持ち主は 海の底へ沈められてしまう、
という 守り神を。

それは いけません！

と、口を開こうとした人魚の唇を、
ハナミズキの指先が 触れるか触れないか という程度に
そっと 押さえました。

お魚くん、言ってたわよ？
ぼくと小鳥ちゃんの間には、守り神なんて 要らないんだ、って。

ぼくらは まだ知り合って まもないけれど、
深く深く 信頼しあっている。

だから、彼の愛と自分自身を信じることのできない
弱虫の姉さんに、
これを プレゼントするんだ、って。

人魚は もう それ以上
なにも 言葉にすることが できませんでした。

そんな人魚を、ハナミズキは 母のように 優しく抱きしめて、
人魚の気が済むまで、ずっと そうしていました。

朝日が昇る前に、人魚は 海へ戻らなくてははいけません。

最後の星が 姿を消す前に、ひときわ 明るくキラリ、と光って、
人魚に 警告を 発しました。

人魚は 最後に ハナミズキの頬に そっと キスすると、
細くつながった 潮の回廊を従え、
明るくなりかけた海へと、急いで 戻っていきました。

今夜は 満月、という日の早朝。

人魚は 珍しく、昇りかける朝日の中を、海岸へ上がってきました。

人魚が 陸へ上がると、いつものように
彼女の周囲だけ、海水が 満ちていきます。

人魚ひとりの通り道分だけ、細長く 海と陸とが つながり、
海の水が 人魚を守ってくれるのです。

潮の回廊と呼ばれる、この 人魚専用の道をつくることで、
人魚は、短時間に限り、陸に上がることができるのです。

が、彼女が 潮の回廊を使うのも、これが最後でした。

海岸では、人魚を待っている者が おりました。

…来てくれたんだね。

愛しい声に、人魚が 顔を上げると、
そこには 愛する彼の 太い腕が ありました。

はい。

人魚は ふたたび うつむくと、軽く握っていた左手を 上に返し、
ゆっくりと 指を 広げました。

そこには、それは それは 美しい石が 輝いていました。

これは…

はい。
わたしの…守り神です。

人魚は、右手で 彼の手を取り、左手で 守り神をつかむと、
呪文を唱えながら、守り神を 彼の左胸へ、優しく 押し込みました。

美しい守り神は、体を傷つけることなく、
まるで 元の場所へ帰るかのように、ずっと 彼の胸へと 入っていきました。

潮の回廊が、さわさわと 後ろへ引き、海へ戻っていきました。

人魚は…
海の水に守られていた 人魚は…

海から切り離された陸の大地に、
しっかりと 2本の脚で立っていました。

心の底から愛した相手に 守り神を捧げたとき。
そして その守り神が、相手の左胸に 抵抗なく 飲み込まれたとき。

この2つの条件が満たされた場合のみ、
人魚は、薬の力を借りなくても、
2本の脚を 手に入れることが できるのです。

花婿は、用意しておいた 白いドレスを、
ふわりと 花嫁に 着せました。

そして ふたりは、丘へやってくると、
ハナミズキの木の下で、枝に止まった 小鳥の立会いのもと・・・

改めて、永遠の愛を 誓い合いました。

弟である 魚は、その頃・・・

深い深い 海の底 に 沈んでいました。

ここは、海神の宮殿。

守り神を捧げる相手を誤った者が沈められる、
永遠の墓場です。

魚は、泣いていました。

海神の宮殿の、宝凰の間で、
大きな大きな水晶に映る光景を 見つめながら。

そこには、
ハナミズキの木の下で行われている 婚礼の様子が
映し出されていました。

丘へ上がる方法を持たない 魚のために、
海神が この場所へ、魚を 特別に 招待したのです。

水晶に映る映像が アップになり、
花嫁が、まっすぐに 水晶に 微笑かけてきました。

姉さん！
おめでとう！！

弟の声は、元・人魚にも 届いたのでしょう。

姉は にっこりと、頷きました。

あ・り・が・と・う

ゆっくりと動かした唇と 少しズレてはいるものの、
懐かしい姉の声が、魚の耳に 舞い戻ってきました。

ぼくの大好きな、姉さん。
おめでとう。

そして、ありがとう。
嬉しい涙が止まらなくて、魚は そっと まぶたを 閉じました。

姉さんと暮らした長い年月の思い出が
次から次へと 浮かんで来ては、
泡のカプセルに収められていきました。

おめでとう！

おめでとう！

優しい ハナミズキの音が、
続いて、愛する小鳥の かわいらしい声が 水晶から 飛び出してきた、
魚は ふたたび 目を開けました。

大きな 大きな 丸い水晶を のぞきこむと、
そこには・・・

魚の捧げた 守り神が、
花嫁の白い胸元に 人魚のような姿でゆらゆらと揺れているのが、
映っていました。